私の学生時代

ラグビーと芝居

山川　幸世

〝生れは〟〝京都〟
〝学校は〟〝同志社〟

これだけで私はいつも京都人にされてしまう。だが私の家は東京なのである。父が三高の先生をしていたときに生れ、九人姉弟妹の長男の煩わしさから逃れるために同志社へ来たのだが、京都が大好きになってしまったのだから、京都人に思われることは嬉しいぐらいだ。でも、始めはそうでもなかった。

〝行って来ます。今日は少し遅くなりますから〟〝お早ようお帰りやす〟

何いってやんだい、と予科一年生の私は思った。「行って来ます」だけなら「お早よう……」もいいだろうが、こっちがわざわざ「遅くなりますよ」といってるのに「早く帰れ」とはけしからんなどと、その当時はつまらないことに腹を立てたりした。が、年を経るにしたがって、京都の人達が、東京とは違った、おっとりとした優しさからいってくれたのだと想いだして、なつかしい気がするのである。

別に計画したわけではないが、六年間に下宿を十二回変えた。（弁解がましいが、下宿代を溜めてその都度追出されたのではない）塔の段、永観堂前、神楽ヶ岡、若王寺道、下鴨糺の森裏、八幡、寺町頭、竜安寺前、上賀茂等。お陰で、美しい京都の郊外のほとんどを単なる観光客としてではなく自身でじかに知ることが出来た。

正規の学問は怠け放題だったが、いわゆるスポーツやクラブ活動は思い切りやって暴れまわったものだ。とくに予科ではクラス選手として、野球、バスケット・ボール、二百メートル・リレー、ボート・レース、撃剣、ラグビー。正規としては（学科の正規ではありませんぞ）陸上競技、ラグビー。

クラブ活動では、コーラスのプリムローズ・クラブ、絵の鞍馬会（版画を）、写真クラブ、演劇研究会。

とくに気を入れたのはラグビーと芝居だった。ラクビーで印象深いのは昭和二年の秩父宮杯争奪第一回東西対抗マッチである。甲子園球場、相手は慶応義塾。第一日とあって、秩父宮さんが勝ったチームに自分から優勝杯を渡そうというのだから両軍はりきらざるを得なかった。私はタッチ・ジャッジをやった。6－6ぎりぎりタイム・アップ直前に同志社がペナルティーを取った。ゴール25メートル真正面だ。私は、キッカーの東田に、プレースをやれとどなったのだが、聞えなかったのか、ドロップ・ゴールの名手東田は、プレースせず、ドロップをしてしまった。何んと、そのボールはバーの横木にぶつかっただけではねかえったのであった。バーの後方でフラッグを横に振る私の気持はラグビーをやった人でなければ到底察することは出来ないだろう。一昨年の冬、秩父宮ラグビー場の片隅で、同志社が日本ナンバー1のカップを受けるのを見ながら、苦しかった若い頃のことをしみじみと想い出したものである。

芝居の方は、大正十三年六月築地小劇場が出来、この夏始めて夏期講習会を開いたので

夏休みで帰京していた私はこれに参加した。（そのときの同期生には田村秋子、山本安英、滝沢修、伊達信、丸山定夫、杉本良吉らがいる）講習を受けた多くの人達は研究生として劇場に残ったが、私は家庭の事情などあって踏ん切りがつかず、同志社へ帰って来てしまったのである、が、どうにも気持が治らず、酒詰仲男（同志社文学部教授）岡橋祐（立命館文学部教授）らと戯曲研究会を創ったりしたが、どうしても実際的な活動がしたくって、京大の文学部の連中と脚本を取り上げて稽古をやったりしていた。丁度その頃、新しく神学館の前に建ったばかりの学生会館が焼けたので（昭和二年）京大・同大合同でその再建基金募集公演を持った。出し物はロマン・ローラン「狼」。私は演出と〝スパイ〟の役を受け持った。チャペル正面の新島先生の肖像画を被って、〝リーベルテ、エーガリテ、ウ、ラ、モール（自由、平等、然らずんば、死）の横幕を帳って意気軒昂だったことは覚えているが、さて、基金が集ったかどうだったかは、とんと記憶にない。

洛外をほっつき歩くか、ラグビーをするか、芝居するかで六年間は飛び去ったのではあるが、わが学生生活に悔いはない——どころか、その後の自分の商売に、これらの方が正規の学問よりずっと役に立ったと考へている。

だからといって、正規の学問が全部つまらなかったわけでも、また全部怠けていたわけでもない。京都のような街で、六年間ただの一度の女遊びもしなかったのは決してキリスト教のお陰ではなく、予科一年、二年の山本宣治先生の正規の学科「生物学」の講義のお陰なのである。

〝成熟した人間が、結婚も出来ず、金によってしか満足させられないなんてのは、世の中の方が悪いんだ。手淫、自瀆などという言葉に迷わされず、堂々とやりたまえ〟

この言葉に私たちはどんなに励まされたことであろう。そして悔のない清浄な学生生活を終ったのであった。だが、その先生は、そんなことを堂々といったために（これはいい過ぎかな）学校を追われ、遂には国粋主義者の暴力のために命さえ奪われたのである。「武器なきたたかい」を観られた諸君は、あの映画が決して嘘ではないということを、はだで感じて来た私の言葉で信じてもらいたい。

エピローグ

私達が同志社文学部英部科を卒業したのは昭和三年三月である。予科三年、本科三年のはじめての本格的文学士の誕生である。男十三人、女三人、とくに女の文学士は日本で始めてだというので当時のジャーナリズムもだまってはいなかった。

ところがである。

卒業式の何日前であったかはおぼえていない。また、京都新聞が京都日々であったか、これもおぼえていないが、大見出しで〝女文学士四名、同志社英文科から初誕生〟という記事。

おや、おかしいぞ、内の女の卒業生は三人なのにと思って、本文を読むと、同志社英文科は今度始めて四名の女子文学士を生んだ。全員成績優秀であり、職も全部きまった。浅野晃代、上谷雪江、花房貞子そして最後がなんと山川幸世である。私は京都の新聞で女文学士、成績優秀、就職決定と報じられたが、その実は、文学士にこそやっとなれたが、成績不良、就職未定の、「不良学生」だったのであった。

（昭三・英文卒・舞台芸術学院長）